

第6分科会「美術教育」

分科会の報告と討議のまとめ

1、報告と討議

A、表現することのすばらしさ

(①わくわくする出会い ②表現を支える技法 ③見つめあえる場所づくり)

浮羽・三井支部の中学校からは、「水彩の技法と発想の幅を広げる」という実践が報告された。モダンテクニックを使った作品制作の過程に関しての内容であった。制作の過程で、技法を使って彩色したカードを組み合わせ、自分なりのイメージを入れる子どももいた。制作の中で子どもたちどうしでの教え合いがあり、多くの技法を体験することでその後の制作にも生かせる実践となっていた。

粕屋支部の中学校からは、『1年生の「春の野草」「文房具」のスケッチまで』という実践が報告された。現在とりくんでいる活動とコロナ禍においての授業時間の短縮やそれに応じた工夫、町の教育委員会から美術の宿題が出るなど今までにない対応を迫られた様子が報告された。

朝倉支部の中学校からは、「新制服エンブレムデザイン」という実践が報告された。子どもの新制服のエンブレムをデザインするという内容である。エンブレムをデザインするにあたって、自分たちの町の特徴を探りながら、自分たちの住む地域にはどのようなものがあるかを考えた。また、デザイン会社とも連携し、デザインについてのコメントをもらったり、実際にCGデザインに起こしてもらったりすることを通して、子どもたちが意欲的にとりくむ姿が報告された。さらに、授業外で自分の学級のエンブレムを作った子どももいたということであった。

B、人と人をつなぐ美術教育

(①子どもたち、家庭、地域がつながっていく美術教育 ②表現しあう仲間づくり)

八女支部の小学校からは、「自分の心の中を表現」という実践が報告された。休校明け、子どもたちは静かにスタートを切り、学級目標にみんなの手形を押した。改めて子どもたちの手形に愛おしさを感じた。感染への不安をもつ子や夜眠れない子などの暗い感じの作品もあり、今年は特に、子どもたちの選ぶ色・描く形に子どもたちの心が反映されているように感じた。「ひらいて広がるふしぎなせかい」の制作では、思い思いに自分の好きなものを描き、それぞれの物語の詰まった作品を早く持ち帰って家で楽しんでもらいたいと思うほど生き生きとした作品ができたという報告があった。

直方・鞍手支部の小学校からは、『「つなげる」って楽しいね、「つながる」っていいね』

という実践が報告された。「線路は続くよどこまでも」という单元では、線路をつなげるというルールだけを決めたが、作品には様々なものが描かれていた。子どもたちは自発的に鑑賞を始め、その中で集団と関わるのが極端に苦手な子どもも友だちと話することができた。さらに、休み時間にも絵を鑑賞し、自分の絵を説明するなど子どもたちのつながりも生まれた。絵でつながることのすばらしさを改めて感じることもできたという報告があった。

三瀧・大川支部の中学校からは、「みんなが参加できる卒業式に」というレポートが出された。正会員としての参加がなかったため、紙上での報告のみとなった。

C その他 新提案など

今年度は、C その他 新提案などに分類されるレポートはなかった。

2、総括討論

「How To」ということに関しての様々な意見が出された。同じとりくみでも子どもの実態に応じて変えていくことが大切であり、一律に「How To」がいけないということではないという意見が出た。また、小学生・中学生ともに良いところがあるが、中学生になると表現を純粋に楽しめなくなっていく傾向がある。小学校低学年の子どもたちは自分が表現したいものを純粋に表現している。表現を楽しむには、様々なものに会わせて感性を揺さぶることが大切なのではないかという意見が出た。最後に、全員感想を述べて討議を終了した。

共同研究者からは、

(笠原先生)

レポートの数は多くはなかったが、例年と変わらず熱のある会であったと思う。中学生に対してのほぐしということは大事な視点である。年齢に関係無く、心ゆさぶるような作品作りにとりくませることができれば、発達段階という観点は必要ないのではないかとも思う。

(山下先生)

教材にはメッセージがある。それを子どもたちが感じ取るということが大事である。教材にどんなメッセージがあるのかを授業者が強くもっておき、それを子どもたちと共有していくことが大切である。表現を楽しむ心を育てていくことができれば小学校と中学校の差はなくなっていくのではないか。